

学習者の対人関係能力とピア・レスポンスに対する満足度との関連

Relationship between Students Social Skill and Peer Response Satisfaction

富永 敦子

向後 千春

Atsuko TOMINAGA

Chiharu KOGO

早稲田大学大学院人間科学研究科 早稲田大学人間科学学術院

Graduate School of Human Sciences, Waseda University Faculty of Human Sciences, Waseda University

<あらまし> 大学の文章表現授業において学習者同士のピア・レスポンスを5回行い、毎授業後、ピア・レスポンスに対する満足度を調査した。その結果、学習者の対人関係能力とピア・レスポンスに対する満足度との間には相関がなかったことが示された。

<キーワード> 協調学習 文章作成指導 ブレンド型授業 授業実践 Kiss-18

1. はじめに

ピア・レスポンス (peer response, 以下ピア) とは、文章作成過程において、仲間同士が話し合いを通じて、協力的に学習を行う方法のことである(大島ら, 2005)。池田・館岡 (2007) は、ピアには「仲間との相互作用による学び」があるとしている。しかしながら、対人関係能力が低い学習者はピアのようなグループワークは苦手なのではないだろうか。そこで、本研究では文章表現授業でピアを行い、以下の2点を検討する。

- (1) 学習者の対人関係能力によって、ピアに対する満足度は変わるのか
- (2) 対人関係能力の高い学習者と低い学習者とは、ピアに対する満足度の理由は異なるのか

2. 授業

2009年度に私立大学で開講された文章表現授業を対象とした。履修登録者数は160人であった。

学習者は、まずeラーニングによるオンデマンド講義を視聴した。オンデマンド講義は5章から構成された。内容は、わかりやすい文章にするための基本技能、列挙・意見・定義などの記述パターン、レポートの構成などであった。

オンデマンド講義の視聴後、学習者は練習問題に取り組んだ。練習問題は難易度が徐々に高くなるように設定された。

教室授業では、練習問題に関するピアを5回行った。ピアのグループは、学習者の対人関係能力によって編成した。対人関係能力の測定には、Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版) (菊池 1988) を使用した。初回の教室授業において Kiss-18 を使って学習者の対人関係能力を測定し、各グループに対人関係能力が高い学

習者と低い学習者が混在するように編成した。1グループは6人とした。ピアの時間は約1時間であった。ピア終了後、学習者は自分の文章を修正し再提出した。

3. 方法

ピア終了後に、ピアに関するアンケートを毎回行った。設問は、(1)今日のピアに満足したか、(2)満足した理由、または満足しなかった理由はなにか。(1)については、「とても不満・やや不満・どちらともいえない・まあまあ満足・とても満足」の5件法で回答してもらい、1点~5点に得点化した。(2)は自由記述であった。アンケートは、Web上で授業時間内に回答してもらった。

4. 結果

4.1. Kiss-18 得点と各回の満足度との相関

履修登録者160人のうち、受講前に Kiss-18 に回答し、かつ5回のピアすべてに出席した59人を分析対象とした。ピアに対する満足度の平均は、1回目が4.20 ($SD=.66$)、2回目が3.95 ($SD=.77$)、3回目が3.93 ($SD=.73$)、4回目が3.81 ($SD=.83$)、5回目が4.00 ($SD=.90$)であった。Kiss-18の合計得点の平均は53.44 ($SD=10.12$)であった。

Kiss-18合計得点と各回のピアに対する満足度との相関係数は、1回目.037、2回目.118、3回目-.243、4回目.016、5回目.015であった。いずれも有意な相関ではなかった。

4.2. 満足度の理由の分類

満足度の理由に関する自由記述は、GTA (グラウンデッドセオリーアプローチ) (戈木 2005) の手法に準じて分析した。その結果、7つのプロパティ<交流><意見交換><文章改善><雰

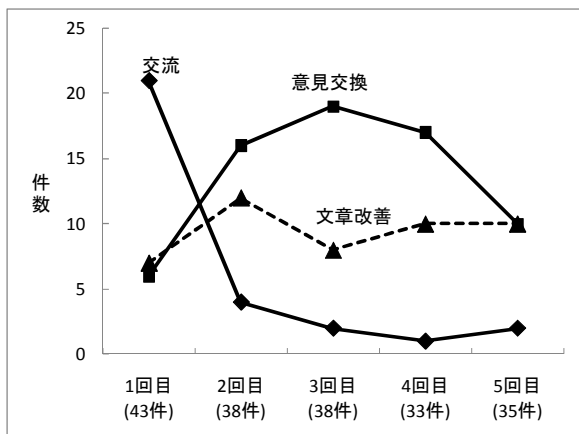


図1 高群のプロパティ件数の推移

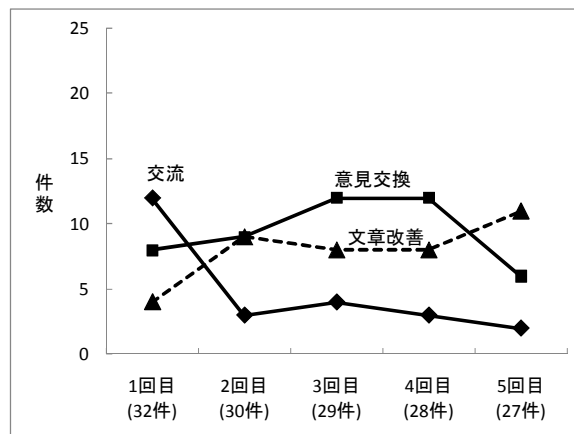


図2 低群のプロパティ件数の推移

囲気><進め方><メンバーシップ><その他>に分けられた。各プロパティのコメント数を求めたところ、<交流><意見交換><文章改善>のコメント数が多かった。

<交流>には、「メンバーとうち解けた」「初対面だが、気軽に話せた」「いままで知らなかった人たちと話せたのが良かった」など、グループのメンバーとの触れあいに関するコメントが分類された。<意見交換>には、「各メンバーから異なった意見が出た」「自分の意見をたくさん言えた」「問題点を指摘してもらえた」など、文章に関する意見のやり取りに関するコメントが分類された。<文章改善>には、「自分の間違いを発見できた」「さまざまな表現方法があることがわかった」「メンバーの文章力が上がり、高度な修正ができるようになった」など、練習問題の出来具合や文章力に関するコメントが分類された。

4.3. Kiss-18 得点と満足度の理由との関連

まず Kiss-18 の平均点 53.44 よりも得点が高い群を高群 ($n=32$)、低い群を低群 ($n=27$) とした。<交流><意見交換><文章改善>の各プロパティの第1回～第5回の度数を群ごとに合計し、 χ^2 検定を行った。その結果、両群の各プロパティの度数の差は有意ではなかった

($\chi^2(2) = .558, ns$)。

次に、高群・低群ごとに、理由のプロパティの件数の推移を調べた。図1、2より、1回目は高群・低群ともに<交流>が最も多かった(高群21件、低群12件)。対人関係能力の高低に関わらず、1回目のピアでは初対面の人と会話し、親しくなれたかどうかの満足度に影響すると考えられる。2回目以降は、高群・低群ともに<交流>が減少し、<意見交換><文章改善>がおもな

理由となった。

5. 考察

以上の結果より、学習者の対人関係能力とピアに対する満足度との間には関連がないものと推測される。また、対人関係能力の高低に関わらず、ピアに対する満足度の理由にも差がないものと推測される。

その理由としては、ピアが課題指向であることが考えられる。ピアでは意見交換はするものの、最終的には自分で自分の課題を仕上げる。そのため、グループで協力しながら一つの課題を仕上げる場合に比べて、協働するスキルはさほど必要ではない。また、ピアではほかのメンバーの文章を見るだけでも自分の文章を改善できる。低群の「人の文章が見られた」「さまざまな人のレポートが参考になった」などのコメントがこのことを示唆している。対人関係能力が低い学習者は、うまく意見交換できなくても自分の文章を改善できたことに満足を感じたのかもしれない。

さらに、今回の課題は事実に関する説明が中心で、書き手の価値観を問うものでなかった。そのため、メンバーからのコメントは、文章に対してであって、自分の価値観に対する非難ではないので受け入れやすかったのかもしれない。

参考文献

- 池田玲子, 館岡洋子 (2007) ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために。ひつじ書房, 東京
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する。川島書店, 東京
- 大島弥生ほか (2005) ピアで学ぶ大学生の日本語表現。ひつじ書房, 東京
- 戈木クレイグヒル滋子 (2005) 質的研究方法ゼミナール—グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ。医学書院, 東京